



# NEWSLETTER

Vol. 2 No. 1

JUNE 1989

## フルブライト計画改善のために

— “リトリート” の効用 —

日米教育委員会事務局長 カロライン A・又野 ヤン

ウェブスター辞典によると、“リトリート”とは、「祈り、瞑想、思索のための一定期間のグループによる引きこもり」である。

日米教育委員会 (JUSEC) は、昨年10月14日から16日まで、御殿場の経団連ゲストハウスで、この「リトリート」を行い、「フルブライト計画の現状と将来」について語りあった。参加者は、小山八郎日米教育交流振興財団 (フルブライト記念財団) 理事長、加藤幹雄国際文化会館専務理事、佐藤ぎん子労働省婦人局長、榊原胖夫同志社大教授 (JUSEC 委員)、嘉治元郎放送大学副学長 (同) などフルブライト同窓生12人を含む約25人。

討議は、JUSEC が現在重点を置いている分野 (米国の研究、太平洋地域の政治経済関係、現代技術社会の諸問題、教育の国際化) についての研究の現状及びそのプログラムの妥当性を中心に展開された。そこで得られたコンセンサスは、日米フルブライト奨学生は、それぞれの専門分野の研究をすすめる一方で、米国および日本の文化と歴史についての知見をより深めるよう勤める必要がある、ということだった。

最も活発な論議の対象となったのは、フルブライト基金を日米双方が半分ずつ負担することに関する問題で、日本のフルブライト同窓生からは、日本政府は同計画の歴史を考慮し“思いやり”予算の形で“恩返し”を考えべきだとの意見が出された。

私が JUSEC 事務局長となってから今回で4回目の「リトリート」である。最初は、私が JUSEC に参加して2年後の1974年で、将来のプログラムを検討するひとつの方法として企画した。その後、1979年、84年そして88年と開いた。その経験から、私は、4、5年ごとに、フルブライト計画を再検討し計画が時代の要請に遅れていないことを確かめ、容易に落ち入りやすい自己満足的なマンネリ化を防ぐため、このような「リトリート」

をもつことは、大変に有益であると思っている。JUSEC 委員ではない方々を招くことにより、フルブライト計画そのものについてだけでなく、日米関係全般についての広範囲にわたるさまざまな見解をえることができる。

同窓生及びその他の方々から同計画についての意見をうかがうことより、JUSEC は計画の修正を自信をもって行うことができた。今回の「リトリート」のあとで、JUSEC は次のような主な修正を行うことを決定した。

— 日本人大学院研究奨学金は、日本の現在の経済力を考慮して、全額支給、2万ドル、1万5千ドル、1万ドルの4段階のシステムにする。(これまでは全額支給または旅費支給)

— 自然科学及び応用科学の比重を下げる。日本政府は1989年度にこの分野で多くの新プログラム (特に米国人を対象に) を発足させたからである。

— 日本人奨学生全員に対し、自らの専門領域のほか、米国史及び米国社会について少なくとも1コース、できるなら二コースの単位をとるか聴講することを期待する。米国人奨学生には、日本に到着する前に日本語及び日本文化について勉強しておくことを勤める。

— ドル安のために、特に扶養者のいる米国人奨学生の苦中を考慮し、支給額を改善する。

最後に、「リトリート」は、同窓会がフルブライト計画に対してきわめて力強い支援を与えていることを JUSEC 委員 (特に政府代表) 及びその他のゲストに認識してもらい重要な機会となった。同窓会の支援がなければ、今日、日米フルブライト計画が、その内容及び財政規模において質量ともにきわめてすぐれたプログラムとして、世界に知れわたるということにはなかったであろう。(訳 近藤 健)

# 東京同窓会、平成元年総会

—242人参加—

ガリオア・フルブライト東京同窓会の平成元年度総会及び懇親会は、4月21日午後6時から東京丸の内日本工業倶楽部で開催、出席者は242人にのぼりました。

まず、川村茂邦会長が挨拶され、会員の中に年会費の払い込みを忘れる人がありますのでよろしくご協力をとのお話がありました。そのあと、同会長、「実はオフレコですが」と、会長自身昨年の会費払い込みを忘れていたことを告白、お許し下さいとユーモアあるご挨拶。そこで陪審員（会場）から「正直な白に免じ、無罪？」との評決が下されました。

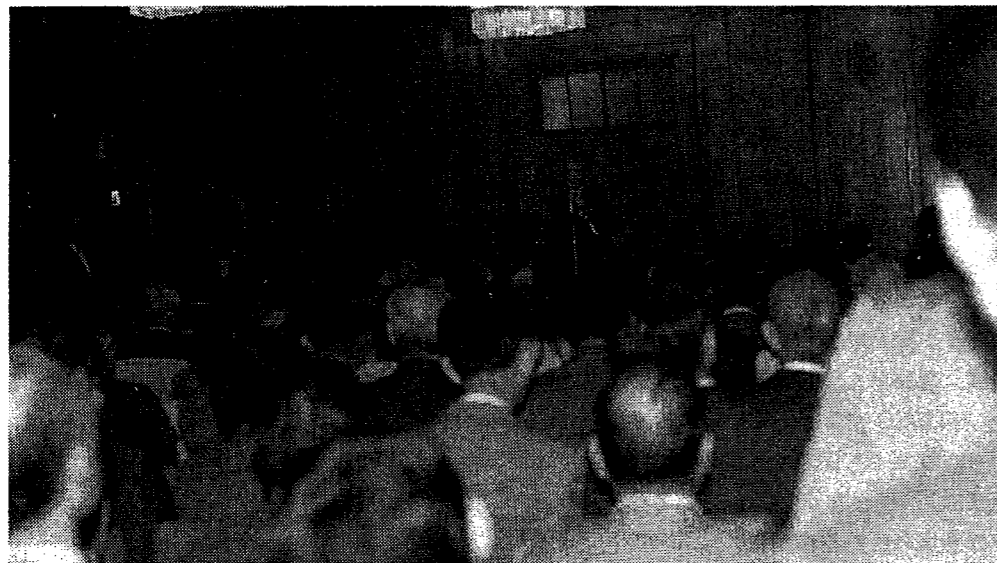
つづいて議事に入り、1988年度事業報告・収支決算報告、1989年度の事業及び予算案が拍手のうちに可決

されました。現在522万1千円の財産があるとのこと。まことに結構で、もっとふやして日米交流に資したいと思しますので、必ずもうかる“未公開株”があればぜひご紹介下さい！

このあと、ホスピタリティ委員会の高沢廣茂委員長から、4月10日の役員会で承認された同委員会の新組織の紹介・報告が行われました。これは、来日するアメリカ人フルブライターへのサービスを多面的に行うための組織づくりです（詳細は別項）。

総会議事終了後、大河原良雄前駐米大使（1951年ガリオア奨学生）が「ブッシュ新政権—その意味と課題」というテーマで約30分講演、通商関係ではブッシュ政権は議会の圧力を受けて厳しい対応を迫られることは必至との指摘がありました。

午後7時から懇親会にうつり、盛会のうちに午後8時半すぎ、解散となりました。（柴田実記）



総会で講演する大河原前駐米大使

## 1988年度決算

☆収入の部	9,333
前期繰越	5,858
会費収入	3,370
利息収入	105
★支出の部	4,112
(1) 事務管理費	1,816
(2) Alumni Meetings	1,095
(3) Hosp.: 歓迎会	584
(4) Publicity	128
(5) Hosp.: 専門部会	198
(6) 予備費	291*
☆収支差額〈千円〉	5,221

## 1989年度予算

☆収入の部	9,301
前期繰越	5,221
会費収入	4,000
利息収入	80
★支出の部	4,570
(1) 事務管理費	2,320
(2) Alumni Meetings	450
(3) Hosp.: 歓迎会	980
(4) Publicity	220
(5) Hosp.: 専門部会	300
(6) 予備費	300
☆収支差額〈千円〉	4,731 【1989年度末残高】

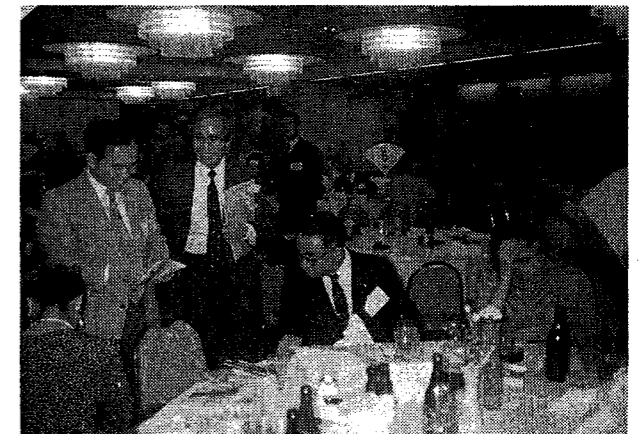
ボランティア募る！

## ホスピタリティ活動

誰れでも初めて外国を訪問したとき、空港で出迎えを受けるとうれしいものです。日本に初めてくるアメリカ人フルブライターが成田空港に到着したとき、誰も出迎える人がいなければ、東も西もわからない彼（女）らとはまどろのは明らか。フルブライターに充実した研究生活をおくってもらい、また日本を理解して帰ってもらうには、まず到着の第一印象が大切—アメリカ人フルブライターへのホスピタリティ活動の充実化は同窓会の懸案でしたが、このほど、みなさまのご協力で新しい組織づくりが完成しました。図にあるように、①成田空港、箱崎への出迎や宿泊提供を含む歓迎サービス②自宅へ彼らを招く自宅歓迎③文化活動④研究支援の四本柱で、ホスピタリティ活動を質量とも充実させることになりました。

すべてはボランティア活動です。歓迎サービスについていえば、成田近郊にお住いの方は成田空港へ、東京在住の方は箱崎で出迎えてホテルまで案内するという仕組みです。私もひとつお手伝いしてもよいという方は、日米教育委員会事務局の伊藤さん（電話03-580-3235）あるいは高沢（03-304-7658）までご連絡下さい。

この春、アメリカから5家族のフルブライターが初めて日本の土を踏みました。私（高沢）の経験によると、フルブライターは1年分の衣類やその他生活、研究に必要なものを持ってくるので、荷物は10個前後になります。成田空港なら、ABC航空手荷物サービス(株)に宅配便で頼むと、赴任者には便利です。（高沢廣茂記）

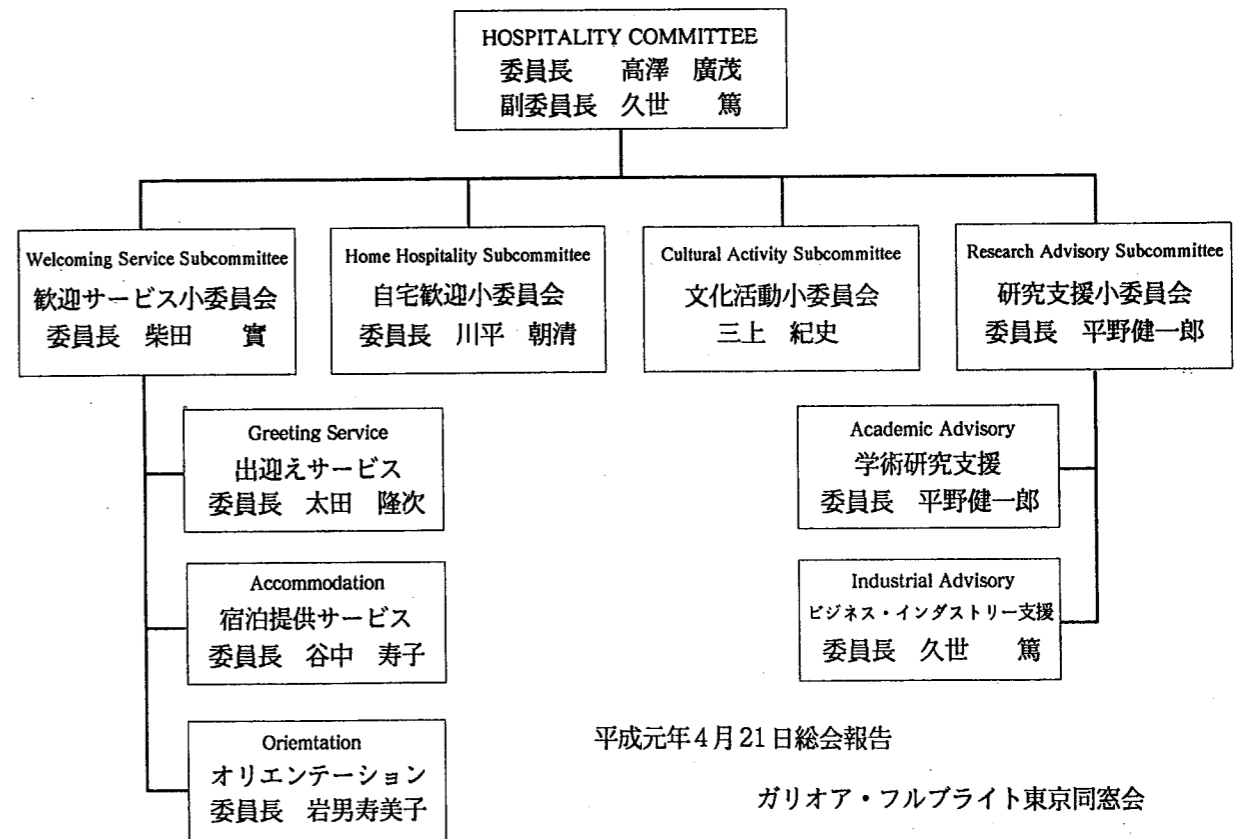


◇その他のホスピタリティに委員会報告

- ①アメリカン・グランティ歓迎パーティ（写真）。1988年11月4日赤坂東急ホテルで140人参加。
- ②講演会。「日本における外国人留学生の諸問題」岩男寿美子慶応大学教授。1989年2月23日。大日本インキ化学大会議室。

### ガリオア・フルブライト東京同窓会

#### ホスピタリティ委員会組織図



平成元年4月21日総会報告

ガリオア・フルブライト東京同窓会

会長 川村 茂邦

# 「冠奨学金」一億円へ

## 在阪篤志家の寄付も

1988年の「冠奨学金」(各地区同窓会及び各企業より継続的に寄付をいただく)募集は、大きな成果をあげることができました。みなさまのご協力に感謝いたします。

前号「ニュースレター」で呼びかけましたように、フルブライト記念財団の募金活動は、1987年度は同窓生による個人寄付が主体でしたが、1988年度は冠奨学資金の獲得に力を注いだ結果、寄付団体の数は飛躍的に増加、14団体(11社と3地区同窓会)から8千8百万円の資金をいただくことができました。これにチャリティ・ゴルフの募金800万円を加えると、総計9千6百万円になります。

このうち新たな冠奨学金として、大日本インキ化学工

業(株)、富士銀行、日本興業銀行が加わりました。また、九州地区同窓会が2千万円、東北地区同窓会は宮城県庁、仙台市役所のご支援をえて8百万円の寄付を集めていただきました。

これらの資金によって、1989年には、米国人18人、日本人2人、合計20人の留学生をお世話することが可能となりました。

1989年度の募金は、新たな寄付先を開拓中ですが、日本自転車振興会による補助金が国際経済交流財団を通して2千万円いただけることをご報告します。また、大阪在住の篤志家志野義治氏がフルブライト奨学資金制度の趣旨に賛意され、1億100万円の私財を寄付されました。この資金については、志野/フルブライト奨学金を別途設置することになりました。

日米関係の緊張が高まりつつある折でもあり、相互理解特に米国の日本への理解の重要性がますます高まっています。今後とも、法人、個人にかかわらず、募金にご協力下さるようお願いいたします。(小西輝明記)

### 1989 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST (20)

#### AMERICAN GRANTEES

Name	Discipline/Topic Grant	Grant
<b>I. PROFESSIONAL RESEARCH SCHOLARS (11)</b>		
Mr. ABERT, James G.	Municipal Waste Recycling	Mitsuiwa Group
Mr. BATES, Laurence W.	Govt-To-Govt Commercial Agreements	Nissan Motor
Ms. CLYMER, Susan K.	Biotechnology Venture Capital	Takahashi Foundation
Ms. LANGAN, Patricia A.	Japan Import of U.S. Program	IBM Japan
Mr. MCGILL, Douglas C.	Japan Environment Problem	Mitsubishi Group
Mr. NEWMAN, James M.	New Int'l Capital Rules	Industrial Bank of Japan
Mr. POLLACK, David	Modern Japanese Novels Studies	Mitsui Group
Ms. RAPHAEL, Dana	Medical Anthropology Program	Mitsui Group
Mr. ROGERS, Minor L.	Japanese Buddhism-Rennyō's Letters	Dainippon Ink & Chemicals
Mr. WHITNER, Michael	Banking/Securities Legal Barrier	Fuji Bank
Ms. WOLFE, Nicola	Neuropsychology (Cross-Cultural)	Japan Economic Foundation
<b>II. GRADUATE RESEARCH FELLOWS (5)</b>		
Ms. ARAI, Paula K. R.	Zen Buddhism-Sotozen Buddhist Nuns	YKK
Ms. CHILCOTE, Amy	Anthropology-Moritist Group	Sumitomo Group
Mr. HARA, Richard T.	Anthropology-Family Farm Strategy	Japan Economic Foundation
Ms. IJIRI, Lisa	Japanese Children Reading Skill	Japan Economic Foundation
Mr. JAFFE, Richard M.	Zen Temple Practice (Soto-shu)	Japan Economic Foundation
<b>III. SITE-SPECIFIC GRADUATE FELLOWS (2)</b>		
Mr. KONOVSKY, John C.	Japan Edamame Marketing	Tohoku G/F Alumni Assn
Ms. NAKATANI, Christine	Gross-Linguistic Study	Kyushu G/F Alumni Assn

#### JAPANESE GRANTEES

<b>IV. JAPANESE GRADUATE STUDENTS-ALL-EXPENSES (2)</b>		
Mr. KUMANO, Yoshisuke	Environmental and Science Education	Mobil Oil
Ms. WAGATSUMA, Yukiko	Disease Control (Int'l Health)	YKK